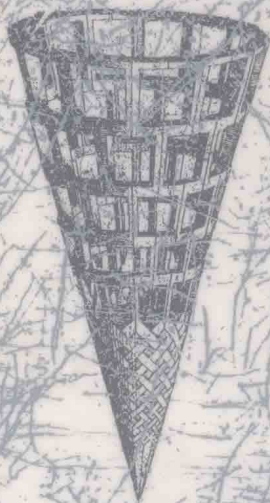


逆羽

辻章



逆羽

tsuji akira

辻章





辻章（つじ あきら）
一九四五年、神奈川県に生まれる。
横浜国立大学経済学部卒業。一九八
六年八月、「三田文学」に「未明」
を発表。

逆羽

一九八九年三月一〇日 第一刷印刷
一九八九年三月一五日 第一刷発行

定価一五〇〇円

著 者 辻 章

発行者 福武總一郎

発行所 株式会社 福武書店

東京都千代田区九段南二一三一二八
〒一〇二 電話(〇三)二三〇一三三二
振替口座(東京)六一〇五〇九七

本文印刷 大日本印刷

製 本 加藤製本

平版印刷 栗田印刷

(落・乱丁本はお取替えいたします)

逆
羽
目
次

逆
羽

7

みやまなるこゆり

65

未
明

103

朝
の
橋

155

彼
岸
花
火

199

装丁
菊地信義

逆
羽

逆
羽

初めて藤島享次がその坂道を上って行った時、両側につづいてゐる桜並木が満開だった。昼近い時刻であつた。自動車がよくすれちがえるほどの道幅の、その右手は崖になつてゐる。崖の斜面には木造の小さな家が点々と建つていたが、道の左手に寄ると家は崖下にかがみこみ、屋根も見えなくなつた。桜並木を透かして、崖の空間の向こうに再びせり上がったように草と雑木の丘が見えた。

歩きながら、享次は白い花の塊を見上げた。枝の間から一面に薄く雲のかかった空が、人間の肌のようにのぞき、それが享次の歩調につれてフィルムのコまのように動いた。

坂の左手には、草におおわれた小高い丘の斜面がつづいてゐる。享次は、まるで自分が深い山の中に入つて行くような錯覚を感じた。

左側の並木の、幹と幹の間に足をとめ、享次は腕時計をのぞいた。水上との約束の時間までは、まだ二十分ほど間があつた。眼の前を二、三人の学生が声高に喋り合いながら、上つて行く。

その学生の十数メートル先に、中年のがつしりとした体格の男が、こちらに背を向けて立つて

いた。男は腕を組み、坂の上を見つめているようであった。

ふり向いた男の横顔と、その眼の配り方で、享次は、男が私服刑事であろうと判断した。しかし、男は享次には関心がなさそうに、しばらくそこに立ちつくし、やがて腕をほどいてゆつくりと坂道を下りて行った。

男が眼の前を通り過ぎ、その背中を見送って、享次はまた坂道を上りはじめた。草と土の入りまじった微かな臭いが顔の前を流れ過ぎた。

二年前に、街頭で初めて私服刑事に荒々しく腕をねじ上げられ逮捕された時も、今と同じ季節だった。三日間とめられた留置場の同じ部屋に、初老の瘦せた泥棒がいた。男は、泥棒を職業にしているのだ、と自分で言い、しきりに享次に話しかけては、低い声で説教をするような言葉をくり返した。

その時にも、留置場の小さな窓から、微かに草の臭いが漂って来た記憶があった。

喋り合いながら、学生たちが次々と享次を追いこして行く。見るともなく、そのいくつかの背中を眼をやりながら、享次は坂道の端を並木に沿うように足を運んだ。褐色の幹にビラが白く点々と張りつけられている。

空中から、眼に見えないほどの細い糸で吊り下げられている小さな金属の円錐が、頭の中でゆつくりと傾いて行く。その奇妙な感覚が、いつの間にか鼻腔の草の臭いの中に溶けこんでいる。享次は、時々ふいにこうやって頭の中に現れる円錐の鋭い先端をじっと見つめた。今、あの時と同じ風景の中に自分はある、と享次は思い、もう一度息を吸いこんだ。

それは、享次の生まれた山の中の、小さな教会の地下室であった。小学校に入ったばかりの享次は、同級生と二人、もう半月ほど毎日、日課のように学校の帰り道、この地下室に通っていた。酢をふりまいたようなかびの臭いのする、湿気た空気の中を、土埃が霧のように漂っていた。コンクリートの壁の最上部に、二個所だけ開いている明り通りの小さな窓から、薄くぼんやりとした縞模様のように日が差しこみ、教会の北側の木の扉を開けて地下室への石段を下りて行くそのたびに、享次は水の底に入るような気がした。

享次は、同級生と、その地下室の固い土の床の中央に、少しずつ小さな小屋を組み立てていた。壁際に乱雑に積み上げられている建材の残りの板切れや丸太、かんなを当てずにそこに置き去りにされた角材を、二人は丹念にひもで組み合わせて行つた。長さも太さも不ぞろいな木切れをしばり合わせた梁や柱は、たびたび傾いでは歪み、ようやく形らしくなつては音を立てて倒れた。

くずれた小屋を、そのたびに初めから何度も組み立て直し、その日、屋根を載せれば小屋は完成するはずであった。表面にセメントの固くこごつた跡のこびりついている、幅五十センチほどの板が、屋根にはちようまい具合だった。

空箱の上に乗り、小屋をはさんで同級生と天井に数本の横木をわたし、その上に享次たちは横木を動かさないように、そつと一枚ずつ板を載せて行つた。

空箱を小屋のはしにひきずつて行き、その上で最後の板を載せ終つた時、享次は向い側の同級生と顔を見合せて、思わず笑つた。そして空箱から跳び下りて、小走りにそばに来た同級生

と、もう一度大声で笑い合った。「中に入ってみようよ」と同級生は言い、先に、小屋の板と板の間のせまい入口から、体を斜めにして中に入って行った。つづいて入ろうとした享次に、同級生は中から「そうとな」と言った。板に触れないように体を横向きにしながら、享次も「そう」と言った。

せまい小屋の端と端に、五十センチほど離れて二人は向い合った。それでいっばいの距離なのだった。

同級生は頭の上を見上げ、セメントの跡のざらざらとこびりついた天井板にそつとさわりながら、「雨が降っても大丈夫だよ」と満足そうに言った。

享次も、今張り終えたばかりの天井板を見上げた。その時に、享次の胸の中に、何か白い隙間のようなものが走った。隙間は光のようでもあり、音を立てずに通り過ぎる風の間でもあった。

享次は空中に上げかけた腕をとめ、あお向けに天井を見上げている同級生に眼をやった。顎の先端が白っぽく、そこだけが首から離れたように突き出ている。

享次は突然、自分がひどくつまらないことをしている気がした。同級生の顎の先をじつと見つめ、雨も降らない地下室に小屋を作るなんて、と胸の中で呟いた。しかし、その言葉は享次の胸の中に走った隙間とは違うものであった。何か違う理由が自分の中にある、そしてその理由は、冷たいいびつな手ざわりをしている、と享次は感じた。

わざと押してみたり用心深く揺すってみたりして、小屋が予想よりもずっと堅牢にできている

のを何度も確かめ、ひとしきり自分たちの仕事の跡を賞め合つて、二人は小屋を残して地下室の階段を上った。

甲高い声を上げながら扉を開け、地下室の外に出ると、真白な光が体を一気に晒し上げ、温い大気が全身を包んだ。出口の正面に、その時、桜の太木が満開の花をつけて立っていた。木の縁の、枝がまばらになった空間から、いくつもの空の断片が歪んだ多角形を作つて点々とのぞいていた。享次は吸いこまれるように、その小さな空を見つめた。高い声で喋りつづけながら、享次は胸の中で一心にその数を数え始めていた。

突然、心臓が激しく動悸を打ち、体の内側から享次の上半身を揺さぶった。動悸は不規則に高まり、また小さくなつて、それを何度もくり返した。享次は隣りに立っている同級生の横顔を、ぬすみ見た。この動悸は誰にも気づかれてはならないことだ。なぜか享次は反射的にそう思った。

同級生は腕を水平に上げ、ラジオ体操のように振り回していた。享次は両肩をシャツの内側で、目立たないようにきつくすぼめた。胸の奥が軽く締められるように痛み、その痛みが通り過ぎると、動悸はやんでいた。

翌日、学校の帰り道、享次たちがまたその地下室に入ると、でき上がったばかりの小屋は、跡かたもなく姿を消していた。階段を下りたその場所で、享次と同級生はしばらくぼんやりとしていた。小屋のあった地下室の中央あたりの土の上に、きれいに掃き上げられた跡が残っていた。享次と同級生とは、薄暗い地下室の壁際にもと通りに積み上げられている材木や板きれの影を

見まわし、それから顔を見合せて階段を駆け上り、夢中で一目散に扉から走り出した。

享次たちの秘密は、この教会の外人牧師に何もかも知られてしまったのにちがひなかった。誰にも秘密で、そしてもちろん牧師にも無断で、享次たちは教会の地下室に小屋を作り始めたのだ。ひきずるような長い僧衣をいつも身につけている、早足で背の高い牧師。尖った鼻の奥深くからじつとにらみつけるその鳶色の眼が、走る足をよるめかせるほど恐ろしかった。

同級生の姿を見失い、狩り立てられた小動物のように生垣をかきわけ、敷地の外に出ようとして、享次は後ろをふり返った。雑木の茂みを越えて、その上に桜の大木の頂きが見えた。花の頂きは、かすかに緑色がかっていた。何もないものと通りの地下室の空間が、そのわずかにのぞいている花の下に、薄暗く広がっているようだった。

何もしなければ良かった。享次は荒い息を吐きながらそう思った。心臓がはげしく動悸を打ち、口の中が乾き粘りついた。

何もない、ガランドウの地下室に小屋を建てたこと。それが何かの間違いだったのにちがひない。何もかもなくなってもとのままになってしまふのを、その時から知っていたような気がした。

生垣を抜け出て、享次は草の中の道を歩いた。動悸は、なかなかやまなかった。胸の奥が痛くなつて、それが通り過ぎればもと通りになるのだ、と享次は思い、肩をきつくすばめ、誰にも見られていないのを確かめるように、あたりを見まわした。